道路脇に潜むエゾシカ。他のドライバーは気づいていないかもしれない

身近な野生生物にも目を向ける

浅利裕伸 帯広畜産大学

人が野生生物に与える影響を考えると、メディアによく出てくるのは「環境破壊（環境汚染）」や「乱獲」といった内容ではないだろうか。しかし、森林を伐採してもそこから動物が逃げ出す場面を見ることはないし、生活の中で密猟者に出くわすことなど考えられないため、私たちがこのような問題を身近に感じることはなかなかできない。

それでは、普段の暮らしの中で野生生物に与える影響をみることはできないのか？　通勤をイメージしてみる。まず家を出る。「この家はいつ建ったのだろう？　建設の前は水田が広がり、トンボが飛んでいたかもしれない」。そして車で仕事に向かう。最近建設された新しい道路を走る。「この間まで林があったが、今では道路の両側に林が分かれている。林に暮らす生物は道路を渡って移動できるのだろうか」。職場に到着。「職場の周りに住みついているノラネコが何かくわえている。小鳥だ」。仕事が終わり、自宅に向かう。「林が分断されている場所で道路にタヌキが出てきた。危ない」。自宅に到着した。さて、われわれが野生生物に与える影響は？

生物が受ける影響は、その生物が希少であれば気づきやすいが、よく見られる生物の場合あまり目を向けられないこともある。暮らしに慣れてしまった身近な場所であればなおさらである。私もリスやモモンガ、キツネが身近にいる暮らしに慣れてしまっている。日々の暮らしで気づきを増やし、身近な動物にもっと目を向けたいものである。